

涼しさ

七夕の飾りがゆれ東京入谷の鬼子母神境内の朝顔市が始まる頃となると、梅雨もいよいよ集中豪雨の危険期間に入ってくる。梅雨は蒸し暑い亜熱帯の盛夏と爽やかな初夏の季節を分ける雨季であり、その境の前線に海上からの流れ込む湿った気流との接点で大雨となる。

夏が一時的に強くなって前線を押し上げると、梅雨の合間の強い日差しが照りつけ、蒸し暑さに慣れていない身体には厳しく、つい涼しさに救いを求めてしまう。

暑さあつての涼しさがあり、涼しさは瞬間の感覚といわれている。もともと日本人は自然に溶け込む感覚で見る、聴く、嗅ぐ、味わう、触れるという五感の全てで涼しさを感じ味ってきた。軒先にはヨシズが掛けられ南部鉄の風鈴がつるされ、そよと吹く風に涼しげな音色が流れる。良く磨き上げられた縁側に置かれた丸木の盆には、赤い西瓜の切り身が盛られ、脇には無造作に団扇が放りだされ、打ち水された庭には、朝市で買った朝顔の六

寸鉢が並んで涼しげな風情をかもしだしている。

涼しさの極みは涼風であり、自然の風には「f分の一という”ゆらぎ”があつて、風鈴を微妙にゆらして、人の深い情感のところで涼しさに触れている。

涼しさをさらに実感しようと思えば湧き水や井戸水の冷たい美味な水を味わって胃のふ深く滲ませてはどうだろうか。『へうへうとして水を味わふ』という句を詠んだ漂泊放浪の俳人、種田山頭火は「たべることがなければおいで涼しい水」とも詠んでいる。

さらに冬の南半球に飛べば太陽が顔を出さない暗夜の世界にオーロラが輝き、涼しさを通りこした厳寒の世界がある。世界最低気温の記録は七月二十一日の氷点下八九・一度、南極大陸上のポストーク基地で観測されたものである。